
2次元トリップ！

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2次元トリップ！

【Nコード】

N2819Z

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

どこにでもいる普通の中学生、榊凛奈は

「家庭教師ヒットマンREBORN！」が大好きなヲタク。

ある日、リボーンの本を読みながら歩いていて「リボーンの世界にいきたくないな！」なんて思いながら信号を渡っていると、信号無視のトラックがつつこんできた。

妙に騒がしいな、と思いながら起きてみると・・・

ツナの家の前にいた。

主人公紹介（前書き）

今回は主人公紹介です。

次回から、本題に入っていきたいと思います。
駄文ですが、見てくれると嬉しいです^^

主人公紹介

この小説は、「家庭教師ヒットマンREBORN!」の原作者と
はいつさい関係がないものです。
ご了承ください。

主人公・・・さかき 榊 りんな 凛奈

年齢・・・13歳（中学1年生）

身長／体重・・・153? / 45?

性格

どこにでもある普通の中学生。少年漫画が大好き。特にリボーン。

（ヲタク）

性格は明るいが、落ち込むと立ち直るのにやや時間がかかる。

居合道や空手をならってる。そこそこ強い・・・かも。

成績は中間で運動は得意。

主人公紹介（後書き）

次回から更新していききたいと思います！

え、何ですかコレ？（前書き）

・・・書いていたのに全部消したという最悪な事態（泣）
あれ、保存ってどうするんだっけ。

まあ、とりあえず駄文ですがよろしくお願いします。

え、何ですかコレ？

『時間だよ。あと1分で支度しないと・・・ただじゃすまないよ?』

ピッ

携帯のアラームからなるアニメボイスを手でとめる。

黒髪の綺麗なロングヘアーが台無しな寝癖のつきかた。彼女は榊凛奈。

「起きますよ！雲雀さん でも、今日は土曜日だからあと1時間寝ても良いよね！」

バンッ

ドアが勢いよく開いて、凛奈の母、薫が入ってくる。

「凛奈！早く起きなさい！今日はリボーンの最新刊の発売日でしょう?」

二度寝するところを阻止されたが、大事なことを忘れていた。

「そうだよ！今日はリボーンの発売日だよ!」

「だから、早くしないとなくなるわよ?」

「うん!」

目を輝かせながら着替えをする。

「それと凛奈。」

「何?」

「そのアラーム、音小さくしなさい。」

「え、何で？小さいと意味ないじゃん。」

「・・・その、恥ずかしいからよ。」

「えゝ！雲雀さんの神ボイスだよ？イケボだよ？明日はツナにしようとおもっているのに！」

「・・・まあいいわ。早く準備しなさいね。」

「はい。」

薫はそういつと凜奈の部屋を出て行った。

「そつかあ、今日はリボーンの最新刊発売日だったねゝあははゝ」

だらしなく頬をゆるめ、ニヘラゝと笑う。今の顔は結構危ない。

「っていつか、今何時だ？」

そういつて時計をみる。

「9時半か・・・。本屋は10時からだし、良い時間か。」

そうしているうちに服を着替え終えた。上は黒の長袖に胸元には赤いリボンがむすんでいる。

下はブルーのショートパンツに黒色のレギンスを履いている。

最後はブラウンのジャケットを羽織って準備完了。

もちろん髪セットも欠かせない。黒髪の腰まである長いロングヘアは横に結ばれていた。

ドアを開いて階段をダダッと駆け上る。ちなみに凜奈の部屋は階段をあがってすぐ左のところにある。部屋はリボーンのポスターやパーカー、Tシャツだらけで、一般人（ヲタクじゃない人）が見たら、引かれるだろう。

もともと、少年漫画なんか読まない凜奈だったが友達に勧められてリボーンを読んでもみると、その

おもしろさに心を奪われた。

今ではBLも読めるほどだ。自称では「リボーンが無い世界では生きられない！」だ。

「じゃあ行ってきますー!!」

「え、ご飯は？」

「いらない！リボーンが先よ！」

「はいはい、途中で倒れないようにね。」

「はい！行ってきますー！」

「いつてらっしゃい。」

スニーカーを履いて玄関を飛び出る。すぐさまものすごいスピードで走る。

本屋まで20分ある距離をわずか10分でついた。

今の時刻はちょうど10時。

「はぁ・・・はぁ、間に合ったぁ！」

乱れた呼吸を整えてから本屋に入る。

「いらつしゃいませ〜。」

店員の高らかな声が響く。しかし、今は店員に会釈をしている場合ではない。凜奈は、少年漫画の棚に移動する。すると、ポップな絵柄で「家庭教師ヒットマンREBORN!最新刊!」とかかかっていた。

「あつたあつた！」

すぐに手に取りレジに持って行く。

「420円です。」

凜奈は持っていた500円を渡す。

「80円のおつりです。ありがとうございましたー。」

手に取ったとたん、走って本屋を出て行き、袋の中におさめられたリボン36巻をとる。

「うふふ〜！家につくまで我慢できないし読んじゃあ〜！」

しかし、これがいけなかった。後にありえない出来事が待っているなんて、このときは思いもしなかった。

そしてリボンを歩きながら読んでいた。

「うわっ、デイモン最悪！ツナの骨がボロボロじゃん！」

なんて呑気に歩いていく。そしてそのまま信号を渡る。まだ青だから轢かれる心配はない。

「よし、ツナ！デイモンを倒せ〜！」

そんなことを言いながら歩く。

「お嬢ちゃん！危ない！！」

漫画を読むことに必死だったため、そんな声に気がつかなかった。

やがてパパーッとといううるさい音が鳴り響いた後、気がついた。

「え．．．？」

トラックが凜奈めがけてつつこんでくる。

気がついたときにはもう、遅い。

凜奈はそのままトラックにはねられた。

（え．．．？何がおこっているの？）

自分ではわからなかった。ただわかっていたのは、通行人の「キャー」という叫び声と、救急車のサイレン。そして――

自分から出ている血の色だけだった。

（あれ．．．。まだ信号青だよ？なのに何で．．．。あ、そっか信号無視ってやつ？あはは、私って馬鹿だな．．．。リボーンを歩きながら読んでいたから気がつかなかったんだ。）

そのまま宙を舞う。そしてそのまま地面にたたきつけられる。不思議と痛みは無かった。

（あゝあ、私、死ぬのかなあ．．．。せめて最後はさ、リボーンの世界に行きたかったよ。まあ無理なんだけどね．．．。）

そんな馬鹿げたことを思いながら、凜奈の意識はそこで途絶えた。

「・・・きろ、オイ。」

「ん・・・んうゝ？まだ眠いよゝ。」

「起きろつつてんだよ。」

「んゝ、うるさいなあ！今日は休みでしょう？もう少し寝たつて・・・。」

「だから起きろつつてんだよ！変質者！」

「ちよ、獄寺君。相手は女の子だよ。」

「はあ？変質者つて、え？あれ、獄寺と・・・ツナ？」

「！？え、君、何で俺たちのことしつてんの！？」

「10代目！下がっててください！他のファミリーの刺客かもしれ
ません！」

「ええ！？そんなあ！」

なんと目の前にはツナと獄寺・・・そしてツナの家の前にいた。

え、何ですかコレ？（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

本当は消える前までは長かったんです（笑）

でも消えて・・・

・・・正直いうと気力が・・・（泣）

なんで消えたんだよう！

っていうか、展開早いですね・・・。

ここは2次元！？（前書き）

また続き書いていきたいと思ひます！

無事におわるといいなあ・・・。

「ここは2次元!？」

「え、ちょ、え??」

凜奈はパニクる。そりゃそうだ。目の前には獄寺とツナ・・・リボ
ーンの漫画に出てくるキャラ
がいたのだから。

「おい、そのアマ。両手をあげろ。」

「はっはいっ!!」

獄寺の言葉につられて思わず両手をあげる。

「・・・武器はもっていないようだな。どうします?10代目。」

「え?どうするって・・・相手は女の子だし・・・。」

「あ、あの・・・。」

2人で話し込んでいるところをおずおずと手を挙げながらいう。

「黙れ、アマ。」

「え!その、私は決して怪しい者じゃ・・・。」

「じゃあ何で俺たちの名前しってたんだ。」

「え?そういわれましても・・・。」

本当になぜだろう。ただトラックにはねられて、気がついたらここ
にいたというだけだ。

そんなこと言っても信じるわけがない。

「やっぱり怪しいッスよ、10代目。どこかに縛り付けておきます

？」

「いや、だからあのね、獄寺君。相手は俺たちと年も変わらないよ
うだし、しかも女の子だよ？」

「しかし……。」

「ツナの言うとうりだぞ、獄寺。」

「リボーン！」

「リボーンさん！」

（え、あのリボーン！？）

あまりの状況についていけない凜奈は、ただボーツとしてるだけだ
った。

「とりあえず、ツナの部屋に放り投げてたらどうだ？そのうちなん
かはくんじゃねえか？」

「そうですね！さすがリボーンさん！」

「ちょ、待てよ！リボーンお前何もわかってないだろっ！」

「本当だったら、瞬殺決めていたところなんだから俺に感謝しろよ。
そこの女。」

「はっ！？だから私は、怪しい者じゃないって言っているの！ただ
の道に迷える子羊です！」

あわてて否定する。

「と、とりあえず、上がりなよ。えーと……名前は？」

「さ、榊凜奈。中学1年生よ。」

「へえ、じゃあ俺の1つ下か。」

（知っていますとも、ツナ……。）

ガチャとツナが玄関のドアをあける。

「あら、ツツ君。もう帰ってきたの？早いね〜。」

「え、いやちよつと・・・。」

「あら、ツナのお友達？」

いきなりツナのママンこと奈々が訪ねる。

「いえ！その、道に倒れていたところを助けていただいただけです！」

「え、そうなの？大丈夫？」

「はい！何とか！」

「そう？ゆっくりしていつてね。」

「はい！」

そのまま2階のツナの部屋にあがる。
入ったとたん獄寺が質問しはじめる。

「さあ、お前はどのファミリーだ？答えないとダイナマイトくらわすぞ。」

そういつて、両手にダイナマイトを持つ。

「ひっ！獄寺君タンマタンマ！」

「わ、私の話を聞いてください！！！」

そういつと、リボン、ツナ、獄寺が私に視線を向け始める。

信じるかどうか、今はもうどうでもいい。私のことを話さなきゃ・・・

・！！

「その、私は・・・異次元からきたんだと思います！」

「思います？」

ツナが問う。

「は、はい。その自分でもわからないんです。だから確信がないけど……。私は多分

3次元からきました!」

「? 3次元はここだよ?」

「えーと、その……。この世界は2次元で私が元いたところが3次元なんです。」

「え? つまり……。どういうこと?」

「つまり、2次元にトリップしたってことかもしれません! 多分。」
「た、多分なの?」

ツナがあきれたように質問する。

「だから確信がないんです!」

「で、でも俺たちの名前を知っていたのは何で?」

「それは……。知っていたとしか言えません。」

「そうなんだ……。」

「その、信じてくれますか?」

「え? うーん……。」

私の言葉にツナは首をかしげる。

「まあとりあえず、信じるよ。俺たちの世界も信じられないようなことだしね。」

「それって、ボンゴレファミリーですよね?」

「うん、そうなんだ。あ、普通にため口でいいよ?」

「え、じゃあ……。ツナ兄、で。」

「うん!」

凜奈がそういうと、ツナはにっこりと笑った。

（天使だあああ！！出血大サービス並の笑顔！！ぶはあっ！）

凜奈は心の中で萌えていた。

「しかし10代目、このアマどうします?」

「柊・・・さんのこと?」

「あ、凜奈でいいよ。獄寺・・・隼人兄も。」

「なっ！お前に名前呼ばれる筋合いはねえっ！」

「まあまあ獄寺君。いいんじゃない、それで。」

「・・・10代目がそういうなら。」

「でも、本当にどうしよう。トリップしたならここに家もないんでしよう?」

「う、うん。学校も・・・。」

「そっかあ。」

「なら、家に住ませたらどうだ?」

そこで始めてリボーンが口を開いた。

「え、ここに?でも、母さんが許すかなあ。」

「いいわよ?ツツ君。」

「なっ母さん!?!いつからそこに?」

そこには、いつからいたのか分からないママンがたっていた。

「ツツ君のお部屋を掃除しようと思って・・・邪魔だった?」

「いや、そんなことはないけど、ここに住まわせて良いの?」

「いいわよ。かわいい女の子が住んでくれて母さんも嬉しいわ。」

「・・・か、母さん。」

さすがツナのママン。心が広い。

「それに学校も並中に通ったらいいわよ。ツッ君と獄寺君と一緒に。」

「そうだけど・・・。」

「お母様！」

そこで獄寺君が言う。本当になんでツナの前やママンの前だと、こ
うも態度がちがってくるのか。
凜奈は変なところで感心していた。

「年頃の男女が一緒に住まうって・・・何か問題があるのでは？」

獄寺としてはもっともな意見。

「それは大丈夫だぞ、獄寺。」

「え、何ですか？リボンさん。」

「ツナが女に手を出すなんて勇気があると思わねえ。」

「な、ひどっ！」

だが、実際その通りだろう。

「うーん、でも困ったわね。部屋が無いのよ。ツッ君、同じ部屋
で良い？」

「はあっ！？ランボとかの部屋は！？」

「それが、もう狭くなるのよ。わるいけど・・・凜奈ちゃん？」

「は、はい？」

「ツッ君をよろしくね。」

「え、ええ、もちろん（？）です。」

「じゃあさっそく並中に転校手続きしないかね」

そついうと部屋から出て行った。

「そ、そんな母さん……。」

「あの、ごめん……。」

「え、いや、別にいいよ。あはは……。」

「おい、その凜奈とかいう女。」

「何、隼人兄。」

「10代目に手エだしたら……ぶつ殺す!」

「わ、わかったわよ!でも、とりあえずツナ抱きしめて良い??」

「はあっ!??」

答えを聞かずに、バツと抱きしめる。

「本物のツナだあ!!かわいい!天使!」

……もともとリボンヲタクである凜奈はツナが現れてから抱きしめたい衝動を抑えていたため、
今、耐えられなくなつて……ゲージが爆発した。

「ちよ、紳!10代目から離れる!」

今さっきの落ち込みから、リボンの世界にきたんだから、これを
楽しまないと
もったいないという思いに変わっていた。なんとも前向きなプラス
思考だ。

そんなわけで、
ツナたちの生活が始まるのだった・・・。

ここは2次元！？（後書き）

ちなみにこの小説、オチが全くありません！
どぞどぞうしましょ？？

っていうかツナ、トリップって簡単に信じるなよ（笑）

ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？（前書き）

大丈夫なのか、この小説・・・。

では今回も妄想爆発でお送りします〜！

今回も、全部消さないように注意しよつと・・・。

ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？

「え〜と・・・凜奈、ちゃん。なんかジュース飲む？オレンジとグレープあるけど・・・。」

「え？あ、えーと・・・じゃあオレンジジュースで・・・。それと「ちゃん」はいらないから。」

「分かった。今、持ってくるね〜。」

（・・・何の恋愛ゲームですか、コレ！！！！相変わらず隣で私を睨んでくる

「自称10代目の右腕」がいるけど・・・そんなことはどうでもいい！！この状況を
楽しまないと！！）

あれから凜奈は少し話をして、今、ティーブレイク（？）中だ。
落ち込みなど、とつくのとうに吹き飛んで、この状況をヒーハー！
真っ最中。

「おい、榊つつう変態女。」

「はあ！？誰が変態よ！自称10代目の右腕の隼人兄！っていうか
名字で呼ぶな！」

「なっ！俺は自称じゃねえ！正真正銘の10代目の右腕だあっ！！」

「まだ完璧な右腕じゃないでしょう！？」

「いいや！完璧な右腕だ！」

「・・・な、何やってんの？二人とも。」

そこでツナが大福とオレンジジュースを3人分もってきた。ちなみにリボーンは今、外出中だ。ちなみにママンも凜奈の転校手続きをしに、並中へでかけている。

「ツナ兄、聞いてよっ！隼人兄が私のことを、「変態女」っていうんだよ！？ひどくない！？」

「本当のことじゃねーかつ！いきなり10代目に抱きつきやがって！」

「ほほう！隼人兄は、ツナ兄のこと好きだもんね！「ツナ命」だもんね！いいのよ？私に妬いても？私はBLもイける口だから！別に引いたりしないわ！」

「なっ！BL！？確かに俺は10代目を好きだけでも、その好きじゃねえ！尊敬の意味をこめての好きだっ！！」

「ふ〜ん！あっそ！まあツナ兄に右腕と認めてもらえるよう、がんばることね！」

「んだとコラアッ！」

「ちよ、やめてよ二人とも！落ち着いて。ホラ、お菓子ももってきたから〜！」

（もお、最悪だよ〜なんか意味分らない女の子が住むことになるし〜）

「ツナ兄がノ10代目がノそういうなら・・・ノそうおっしやるのなら・・・。」

「はあ・・・。とりあえず座りなよ。」

「うん・・・。」

そこで凜奈はオレンジジュースを一口、口に含む。甘酸っぱい。

「もう二人とも喧嘩しないでよ？ただえさえランボとか（獄寺君）で大変なんだから・・・。」

「はあ〜い。もとはといえば隼人兄が悪いのに・・・。」

「んだとお！？」

「はいはい、獄寺君！落ち着いて！」

「っ・・・分かりました。」

「ところで、凜奈。」

「うん？」

ツナが凜奈に呼びかけた。何か質問とかあるのだろうか。

「こんな、のほほんとしていいの？その、3次元？に戻る方法とか考えた方が・・・。」

ごもつともな意見。

「うん、そうなんだけどさ・・・。」

「っていうか、なんでこの世界にこれたの？」

「え」と、その・・・横断歩道でトラックに轢かれたのよあはは・・・。」

「ええ！？笑ってる場合じゃないよ！今頃重症じゃないの！？」

「あはは・・・そうだよね・・・でも、骨折どころか痣一つないし。」

「それはすごいですけど・・・。」

「うん、なんかさ。最後に死ぬんだったら、ツナ兄たちの世界にいきたくないあつて思ったら、こっちの世界にきちゃった・・・みたいな？なんかパラレルワールドみたいだね。」

「パラレルワールドっていえば、百蘭たちのこと思い出すな・・・。ろくなことなかったけど。」

その言葉で凜奈は一つ疑問がわいた。

「あれ？ツナ兄たちはもう、百蘭戦終わったんだね。」

（あれ、でもアルコバレーノ戦はどうなんだろう。漫画の世界とこの世界って、必ずしも比例はしてないってこと？）

「うん、終わったよ。」

「じゃあ、シモン戦は？」

「あゝ炎真君のこと？」

「じゃあ、戦いは終わったんだね。」

「うん。」

「じゃあ・・・アルコバレーノ戦は？」

「え？アルコバレーノ戦？何それ。」

「あ、知らないんだったらいいよ。」

（ってことは、この世界はアルコバレーノ戦が始まる前の日常編ってことか・・・。）

つまりはここは漫画で言う、ギャグ的な日常編だ。凜奈は戦いの世界にこなくてよかった、とほっとした。

「にしても、本物のツナにあえるなんて感激！あ、ねえねえ雲雀さんもいるんだよね。」

「え、うんいるけど・・・。雲雀さんに会いたいなの？」

「うん！」

「あはは・・・あの雲雀さんに会いたいなんて物好きだね・・・。」

「ったくあのバトルマニアめ。」

「あはは・・・。」

「まあでも、並中に通うことになったらイヤでも毎日あえるからいいつか！」

凜奈はふふふん とご機嫌に口笛を吹く。もう前の世界に未練などない様子だ。

「でも雲雀さんにあって何するの？」

「ふふふ・・・それはね、雲雀さんの生ボイス「咬み殺すよ」を携帯に録音してメールの受信音にするー！」

「ええ・・・。」

「あ、その前にツナ兄にやってもらおうかな。」

「ええ！？俺はいいよ・・・。」

「じゃあ、嫌だけど隼人兄。」

「嫌だけどつてなんだよ！」

「しょうがないでしょ！私の友達がすごく隼人兄がすきなんだから！」

「なっ！俺は女共に興味はねえっ！」

「え？誰も女友達とはいってないんだけど？男友達なんだけど？何を期待してるのかな？隼人兄！」

「ためえっ・・・。」

「喧嘩しないで！」

また、喧嘩になりそうなところをツナにとめられる。そのおかげで口喧嘩にはならなかった。

「みんな仲良くやってる？」

ガチャと無機質な音が響いてドアの方を見ると、ママンがたっていた。

「はい、お母様！」

「母さん！何しにきたの？」

「あ、そうそう。凜奈ちゃんの新校手続きやったからね。」

「あ、ありがとうございます！」

「さっそく明日からだけど・・・大丈夫？」

「え、明日！？っていうか、今は何曜日？」

「え、今？日曜日だけど・・・。」

「マジ？明日からか・・・。あの、奈々さん。」

「うん？ママンでいいわよ。」

「えーと・・・教科書を持っていないんですけど・・・。」
「あゝ。」

ママンが「大丈夫よ。」とこたえる。

「凜奈ちゃん、今中学１年生？」

「あ、はい。」

「ならツツ君の１年生のときの教科書貸してあげるわ。」

「ありがとうございます！」

「いえいえ、不便なことがあったら何でも言ってね？」

「はい！」

なんと心優しいママンなんだろう、私のお母さんとは大違い。と、
凜奈が心の中で思っていたことは
秘密だ。

「じゃあ明日からがんばってね。」

「はい！」

そしてさっそく凜奈は、ツナ兄たちが通う、並中に通うことになったのだ。

・・・いいのか凜奈。元の世界に戻ることを考えないで。

ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？（後書き）

今回はあまり前進しませんでしたね。
ぐだぐだですいません。

そのうち雲雀さんも出てきますからお楽しみに！

では、ここまで読んでくださってありがとうございました（＾o＾）

朝ご飯（前書き）

この文章は作者の願望あふれる妄想ですが、おつきあいしてくれると嬉しいです！

では、どうぞ！

また展開が早いですが・・・。

朝ご飯

チュンチュンと朝を告げるスズメの鳴き声になり、凜奈は起きた。

「あれ・・・まだ、6時じゃん。寝てよつと。」

時計の針は朝の6時ちょうどを指している。隣では、ツナの規則的な寝息が聞こえる。

それを見て、凜奈は感嘆の声をあげた。

「て、天使・・・！そうだ、写真とろう！」

完璧な変態行為だが気にしない。さっそく、携帯を取り出し携帯のカメラ機能をたちあげる。

「ふふふ・・・構図はここでつと。あ、ちょい右かな。」

内心、「これを携帯の待ち受けにしよう！」と思う凜奈。かしゅかしゅといろんな構図でツナを撮り・・・20分はたった出あろうそのとき、

「う、うゝん・・・。」

ツナが声をあげる。

（やばっ・・・起こしちゃったかな。）

確認しようとツナの顔をツンツンとつつく。だが、まったく反応がないため、起きていないようだ。

(ふゝ、危ない危ない！)

てへっと舌をだす。

「今のは可愛くないな。」

自分で言っただけにむなしくなる。そういうことがなければ、誰もが振り向く美少女なんだけど。

「どうしよう……。目がさえちゃった。……。よし！」

凜奈は何か思いついたようでポンツと手をたたく。

「ツナの寝顔を堪能しよう！」

うん、変態だ。

「うおー可愛いよお！天使ー！おほつまつげ長っ！」

顔がニヘラーと気持ち悪く歪み、凜奈が男だったら大変だと思うくらい危ない。

「うほほ……。ハアハア……。」

そろそろ凜奈の危ない息づかいが聞こえてきたのか、ツナが目をつすらすと開ける。

目の前には凜奈の顔があったため、ツナは大声を出した。

「うわああっ！！」

ツナは壁の方に向かって後ずさる。

ツナの声で作者も忘れかけていたリボーンも目を覚ました。

「うるせーぞ、ツナ。」

「リ、リボーン！だって、凜奈が……。」

「いいから黙れ！」

リボーンの蹴りがツナの鳩尾に当たる。

「ふげごっ！」

あり得ない奇声をあげてツナは気絶した。

「あ……気絶しちゃった。」

「お前も早くねろ。」

「寝ろって言ったて……もう6時半だし。」

「俺はねるぞ。」

そういうやいなが、リボーンは小さな寝息を立てて寝た。

「寝るのはやつ！の 太より早いわ。」

あのの 太は枕があれば3秒でねれるしな、なんてことを考える。

「はあ、下行こ。」

凜奈はゆっくりたちあがり、ドアに手をかける。ツナたちを起こさないようにそっと出て階段を下りる。

そこには、いつから起きていたのかママンが朝ご飯の準備をしていた。

「あら、おはよう凜奈ちゃん。早いね。」

「あ、おはようございます。」

「ツツ君はまだ寝てるかしら？」

「はい、気絶、じゃなくて・・・熟睡してます。」

「そう。ツツ君たら・・・悪いけど凜奈ちゃん、お手伝いしてくれる？」

「あ、いいですよ。少し顔を洗ってきますね。」

洗面台に行く途中に、ランボやイーピン、ビアンキが寝てる部屋を通る。

（あ、そっか。ランボたちもいるんだよね。昨日は見かけなかったけど・・・。）

それは作者が出すのを忘れてたのです。 作者の心の中。

「えーと洗面台は・・・あった。」

洗面台にたち、温水を出して顔を洗う。今は秋なので、このぐらいの温度が丁度よかった。

「ぷはっ・・・。」

顔を洗ってすっきりする。だが顔の突っ張り感があったので、いつも所持している乳液をぬる。

ちなみにここに持ってきた所持品は、携帯、財布、リップクリーム、ハンドクリーム、化粧水、

乳液、ブラシ・・・など、他にもいっぱいある。そこはさすが女の子。身だしなみに必要な物はしっかりともっているようだ。

髪をブラシでとかして、ゴムで横に結ぶ。

「できた〜っと。」

まだ、寝巻き姿のままだが、ママンの手伝いをしようとリビングに戻る。

「何の手伝いをすればいいですか？」

「ん〜そうね〜みんなの分のコップとかお箸を並べてくれる？え〜と、凛奈ちゃんを入れて

7人分かしら。」

「え？ママンの分は。」

「あ〜私は後で食べるからいいのよ〜。お願いね〜。」

「はい！」

ママンに言われた通り、箸やコップを並べる。そのぐらいの準備は簡単ですぐに終わってしまう。

「できました。」

「ありがとう。じゃあ、みそ汁とかご飯をよそってくれる？」

「はい！」

みんなの分を次々とよそっていく。これもあつというまに終わって、次は卵焼きとか魚とかがおいてある皿を並べた。

「ありがとう、いつもより早く終わったわ。」

「いいえ、これくらいは当然です！」

「うふふ、ありがとね。あ、そうそう凜奈ちゃんは準備は大丈夫？」

「はい、昨日のうちにしときました！」

「さすがね、ツツ君たら毎朝遅刻して大変なのよ。」

「あはは・・・。ツナ兄らしいです。」

（知っています・・・。）

「今は7時ね。そろそろツツ君を起こさなきゃね。」

「あ、なら私が起こしてきます！」

「そう？ありがとね、ランボ君たちは私がおこしとくから。」

「はい！」

そう言った後、ツナの部屋に戻る。

ツナのベッドに近づき、そおつと顔を見る。

「ツナ兄、起きてー！」

「うーん・・・あと5分・・・。」

（この可愛い寝顔をもう少し拝みたいが、今は心を鬼にしなきゃっ
！）

「ツナ兄！起きろ！雲雀さんに咬み殺されるよ！」

「あと5分・・・。」

「起きろー！遅刻するよ！」

「うーん・・・。」

ツナはそれきりムニヤムニヤとまた、寝息を立てるばかり。

「お、起きない・・・。」

「任せろ。」

「え、リボーン！」

いつから起きていたのか、リボーンがベッドにちょこんとたっていた。

すると、レオンが大きい金槌になっておりそこには、１トンと表記されていた。

「え？リボーン……。それ、やばいんじゃない……。」

凜奈が止めるのも聞かず「それっ」といって金槌を、否、レオンを振るう。

凜奈はとっさに目をつむる。

ドンツと音が響き、ツナの「ぎゃあああ！」という断末魔が聞こえる。

「いつてえ……。リボーンお前なあ！もう少し手加減っていうのを！」

「うるせー、早く朝ご飯食べないと遅刻しちまうぞ。」

「へ、今何時？」

「今？今は７時１０分だよ？」

凜奈が答える。

「なんだ、もう少し寝かせろよ。」

「だめだ！」

そっいつてリボーンはツナの手をひねりあげる。

「いでででっ！」

「あはは……。」「

こうしてなんとかツナは目を覚ました。

下に下りると、もうみんながそろっていた。

「ツナ、遅いんだもんね！」

ランボが挑発したように言う。

「はいはい……。」

ツナは適当に流す。

「今日はいつもより早いね、ツナ。」

ビアンキが言う。

「ツナ、横の女誰？」

（あ、そっか、私が知ってもランボたちは知らないんだ。）

「凜奈ちゃんね、昨日から住まうことになったのよ。仲良くしてね。」

ママンが軽く紹介する。

「初めまして、だね。私、榊凜奈。よろしく！……今言うのもなんだけど。」

「ふうん。凜奈、遊べ！」

「ランボ今だめ！お食事中！」

イーピンがランボをたしなめる。

「凜奈もチュウガツコウってところ行くの？」

ランボがご飯を食べながら訪ねてくる。

「うん、そうだよ。ツナ兄と一緒にのところ。」

「ふうん、あつそ。帰ったら遊んでくれる？」

「うん、暇だったらね。」

「嫌だもんね！ちゃんと遊べ！」

（よ、予想以上にウザイ！！）

凜奈はそういいたいのを我慢して「また後でね」という。

「凜奈、かまわなくていいよ。」

「あはは・・・でも小さい子だからきつくあしらえないよ。」

「あららのら凜奈？おれっちは小さくないもんね！」

「あはは・・・。」

やっぱ、適当にあしらうことにした。

「ごちそうさま！」

ツナが食べ終わると同時に凜奈も食べ終わる。

「私も！おいしかったです！」

「よかったわ。」

そのとき、ピンポンとチャイムがなる。

「あ、たぶん獄寺君だ。」

「げ・・・隼人兄か・・・。」

「じゃあ、行つてきます!」

「気をつけてね。」

タタタツと凜奈とツナは玄関に向かい、ドアをあける。

「おはようございます! 10代目!」

「お、おはよう。獄寺君。」

「・・・おはよう。隼人兄。」

「げっ! わきやがった!」

「何よ! その虫がでてきたような言い方は!」

「まあまあ二人とも! 獄寺君も挑発しないで!」

「すみません・・・。」

「怒られてやんの!」

「てめえっ!」

「ストーっプ!」

そこで二人とも黙る。

「朝っぱらから喧嘩しないでよ。ほら行こう。」

「はい!」

「うん。」

無事友達ができるといいな、と凜奈は思いながら学校へ出かける。

「見て! ツナ兄! ツナ兄の寝顔写真!」

「げっ、いつ撮ったの? それ!」

「今日の朝！」

「てめえっ！10代目のお美しい寝顔を無断で撮るなんて！」

「へへーん！うらやましいか！」

「んだと、コラアッ！」

そんな他愛ない会話・・・というか喧嘩をしながら並中へ向かう人だった。

朝ご飯（後書き）

今回本当は並中まで行くつもりでしたが・・・。
また次回にしますね！

では、読んでくださって感謝です！
感想・アドバイスなどあったら、書いてくれると嬉しいです！

いざ、並中へ！（前書き）

やっと並中に行きます！

オリキャラが出てきますよ（＾Ｏ＾）

さて、今回もめくるめく妄想ワールドにおつきあいくださいませ！

いざ、並中へ！

キンコンカーンと、並中のチャイムがなる。

凜奈はツナたちと分かれて、今日から新しいスタートをきろうとしているクラスの前の廊下にいる。

担任は、HRをしているようでドアの向こうから連絡事項等などを話しているのが聞こえる。

先生は、「入ってきて」と言ったら入ってきてね、と笑顔で言っていたが、いっこうにその合図がこない。廊下に立つこと早10分。この先生は、話が長いのか、などと思っていると

「入ってきてください。」

と、先生の声が聞こえた。あわてて床にいていた鞆を持ち、ドアを開けて教室に入る。

緊張していたからか足下がきこちない。

ようやく教卓の前にたつと先生が紹介し始めた。

「中途半端な時期だが、転校生を紹介するわね。榊凜奈さんよ。榊さんから一言お願いしていい？」

「は、はい！えーと・・・榊凜奈といいます。家庭の事情（異次元の事情）で

今日から並中に通うことになります。よろしくお願いします！」

軽くお辞儀をして先生に指定された席へ座る。隣の男子が「俺、藤

崎勇。よ、よろしく。」と顔を赤めながら

言ってきたので、「こちらこそ。」と笑顔で返す。

その仕草にまた男子生徒は赤らめる。凜奈は無自覚？だが、可愛い、というより美人なのだ。

「さて、じゃあ1時間目の準備をして待つように。」

先生の声でみんなは、準備を始める。

（何というか・・・、静かだな。当たり前だけど。）

はあとため息をつき、1時間目の準備をする。1時間目は国語だそうだ。

「国語・・・つと・・・。」

教科書とノートを取り出す。もちろんそれは元ツナの物なので「沢田綱吉」と名前がバッチリ

書いてある。それに気づいた隣の藤崎は、「沢田綱吉？」と訊ねてきた。

「へ？ああ・・・うん。私、2年のツナ兄、沢田先輩の家に住んでいるから。」

「ええっ！？あのダメツナと言われる沢田先輩の家に！？」

その声が大きかったのか、いつきに視線が集まる。

「あつ、ごめん。」

「いいえ。でも、ダメツナは訂正して欲しいな。」

凜奈に笑顔で言われたらうなずくしかない。

「ツナ兄はね、とても優しいんだから！」

「そ、そうなんだ・・・。」

凜奈は、ツナのことを1から10まで教えてあげたかったが、場所が場所なのでやめることにした。

ツナの笑顔とか笑顔とか笑顔とか。（大事なので3回いう。）
まず、引かれないかが問題だ。

そんなこんなで、1時間目が終わり、2、3、4時間目の授業も終わった。

みんなは、思い思いの場所で弁当を食べに行く。
そのとき。

「榊さん、俺と一緒に食べない？」

次から次とくる主に男子の要求を断りツナのいる2年A組に行くことにした。

もちろん場所がわからないので生徒に聞く。

ツナのクラスの前で、「ツナ兄！！！」と手を振る。

他の生徒も「あの綺麗な子、誰？沢田の友達？」とヒソヒソとはなす。

ツナは照れながらきた。

「ど、どうしたの？凜奈。」

「お昼、一緒に食べれないかなと思って。」

「あゝいいよ」お前なんかと10代目が一緒に昼飯食うなんて俺がゆるさねえ!」

そこでうるさい獄寺がきた。

「どうしたんだ、ツナ。」

山本も来る。山本も凜奈に気づいたようで、「1年坊か?どうしたんだ?」と聞いてくる。

(ほ、本物の山本だゝ!!背高っ!)

内心凜奈は興奮していた。

「あのね、山本。この子は昨日から俺の家に住むことになったんだ。」

「へえゝツナン家にか?」

「う、うん!あなたは山本武さんね?以後、武兄と呼んでもいいかしら!」

「お?いいぞ!。」

周りの山本ファンが嫉視のまなざしで凜奈を見るが、そんなことをお構いなく普通に接する。

「あ、ツナ兄。雲雀さんは?」

「え、雲雀さん?さあ・・・。」

「そっかあ、残念。」

「あははっ!雲雀に逢いたいなんて物好きだな!」

脳天気に山本が笑う。

「うるせえ野球馬鹿！」

「あははっ、獄寺はいつもそれだな！」

「けっ。」

「あ、それよりお前の名前は？」

「あ、自己紹介が遅れたね。私は桼凜奈。凜奈って呼んでもらって構わないわ。まあ、好きな

呼び方でどうぞ。」

「そうか？じゃあ、桼で。」

「うん！ツナ兄は凜奈ってよんでるけどね。」

「凜奈がそう呼べって言ったんだろ。」

「10代目、こんな変態女に名前なんか呼ぶ価値ありませんよ！」

獄寺が悪態をつく。

「何ですって、隼人兄！！」

「てめえは、10代目のストーカーなくせに！」

「私はストーカーなんかじゃないわ！ツナ兄を深く愛する一少女よ！」

「てめえが10代目に好意をよせる資格なんぞねえ！」

「じゃあ隼人兄には右腕の資格はないね！」

「なんだと！？」

「まあまあ獄寺君！落ち着いて！」

「あははっにぎやかなのなー！」

そのときにがらがらと扉がひらく。

黒い学ランに肩には鳥。

「君たち、うるさいよ。咬み殺されたいの？」

そう、まさしくあの風紀委員長、雲雀恭弥。

雲雀がきただけで、周りは凍り付くようにしーんと静まりかえる。

「本物の雲雀さんだあ！！」

そのとき、なんと空気の読めない凧奈が発した言葉によって沈黙は破られる。

「私、雲雀さんのファンなの！これから恭弥兄と呼ぶね！」

あはは、なんと恍惚とした表情を浮かべる。

「君、誰？見かけない顔だね。」

「あ、今日から転入してきました！榊凧奈です！」

「ふーん、そう。」

そういういきなりトンファーを振り下ろしてきた。凧奈はとっさにそれを受け止める。

「！！！」

本編では、まだ書いてないが、凧奈は居合道と空手を習ってる。1年生のわりには強い。

「さすが、恭弥兄！スキがないね。」

「ワオ・・・君強いのか？」

「さあ、自分では分からない。」

ニコツと笑顔で言葉を並べる。

「ちょ、雲雀さん！相手は女の子ですから・・・！」
「そんなこと関係ないよ。それとも群れてる君たちから咬み殺そうか。」

「ひいつ!!」

「雲雀つてめえ！」

「まあまあ、おちつけて！」

わたたと雲雀を落ち着かそうとする山本。

「恭弥兄と戦ったら大変なことになるから、やっぱやめた。」

凜奈の声が響く。

「それより恭弥兄！あなたの声、録音させてくれない？」

「げっ！凜奈、お前マジだったのかよー！」

「うん、そうだよ？やっぱり元の世界に帰ったら、友達に自慢した
いもの！」

「声？」

「うん！咬み殺すよってしてもらえない!？」

「嫌だ。」

あっさりと断られる。

「・・・何で。」

そう質問するも、雲雀は帰ってしまった。

「あゝ!!」

「ふう、雲雀さんを怒らすと大変なことになるとこだったよー！」

涙半分にツナは言う。

「かみ殺すって言うてくれなかった……。」

「あはは……。」

凜奈はしょぼーんと肩をすくめる。

「元気だせって！なんなら俺が言うから！」
「本当！？」

ツナの言葉に凜奈はパアツと目を輝かせる。

（言わなければよかった……。）

ツナは内心後悔する。

「じゃあね……、お嬢様、メールが届きましたよ、って言うてくれる！？」

「え……、無理かも……。」

「やって！」

「……はい。」

「10代目！こいつのいうことなんか無視していいですよ！」

「いやあ、でも……。」

「わくわく、ドキドキ！」

「言葉で言わないで〜！」

仕方ないと、一言息を吸い込み……

「お、お嬢様、メールが届きましたよ！？」

「・・・何、それ。」

「へ？だから・・・。」

「届きましたよ！？ってなに。落ち着いて言ってよ。とりなおし！」

「ええ！そんなあゝ！」

「私が満足するまでやめない！」

「てめえっ、調子のりやがつて！！」

「何？じゃあ、隼人兄がやってくれんの？」

「！？」

「でも無理だよ。低脳だもんね！」

「ふざけんじゃねえ！やってやらあ！」

「ふうん、あつそ。じゃあやってみてよ。」

凜奈の畏にまんまとはまる獄寺。まるで小学生同士の喧嘩だ。

「おい、お嬢！メールがとどきやがりましたよ！！」

「ボツ！やっぱ猿ね！なによ、お嬢って！しかも届きやがりましたあ？低脳！」

「なんだとコラ！」

なんだかんだで言い合いは続き、結局良いものはとれず、しかも弁当当まで食べれなくなる始末だった。

そしてこの二人は帰りまで言い合いをし、ツナの神経がどんどんすり減っていくことになった。

まだまだ、ツナの苦労は続きそう・・・。

いざ、並中へ！（後書き）

授業とか作者が頭悪いのとばしにとばしました（笑）

今回は、中途半端に終わりました・・・。少しアイデアが浮かばなかったの・・・。

では、また次回にお会いしましょう！！

A r r i v e d e r c i !

ツナの苦悩（前書き）

今回も、妄想爆発でお送りします！

っていうか、並中で了平を出すのを忘れてました・・・
この小説、とっさに思いついた小説ですからww
そして、獄寺のキャラが少しずれてます（笑）

では、どつぞー！

ツナの苦悩

「はあく・・・疲れた。」

ツナの一言で、獄寺は心配そうに顔をのぞき込む。

「大丈夫ですか？10代目。」

「うん、何とか・・・。凜奈がきてから1日しかたってないのに、俺の神経がどんどん

すり減っていく・・・。」

ちょうど今さつき、「私、本屋に行くから二人とも先帰ってて！」

と凜奈は二人を放置し、

本屋に出かけていった。

そのため、ツナは自分の本音を凜奈に聞かれる心配はない。最も、そんなことを聞いたら凜奈は悲しむ。だが、そんなに甘くないぞ凜奈は。

「まったく、あの変態女。10代目の手を煩わせやがって！いつか果たす！」

「待って待って、獄寺君！もう何回言ったか分からないけど相手は女の子だから！」

「しかし10代目、あのままじゃ変態女は調子に乗って・・・。」

「いい加減獄寺君、変態女はやめようよ。それと盗聴器とか、カメラで録画、なんてされないうちはよっぽどマシだし。」

「だって、10代目の寝顔なんか撮っていたんですよ！？痴女です！」

獄寺の言葉で、通行人たちが振り向く。とくに「痴女」の言葉で。

「わあっ！獄寺君、声大きいって！」
「す、すみません。」

獄寺は謝罪をし、また言葉をつなぐ。

「しかし、10代目の世界に通用するお美しい寝顔をお金も払わな
いで撮るなんて、うらやま・・・コホン！許さねえっ！」

「あれ、獄寺君。いま自分の本音言おうとしたよね？っていうかお
金とつたならもう趣旨かわっちゃうから！」

「とにかくですね、俺がすっかり10代目を命にかえてもお守りし
ます！あの変態ストーカー女が
もしも、というときもありますし！」

「大丈夫だよ、凜奈は普通の女の子だし。（俺の寝顔さえとらなけ
れば。っていうか何気にストーカーっていう言葉がつけたされてる
し・・・。）」

「・・・10代目がそうおっしゃるのなら。」

そんなこんなで、いろんな話をして、ツナの家についた。

「獄寺君、あがっていかない？よければ、宿題も教えて欲しいな・
・なんて。」

「はい、よろこんで！」

「じゃあ、さっそくあがって！」

「はい！」

玄関に入り、靴をぬぐ。そこでママンがでてる。

「ツツ君、おかえり。あらゝ獄寺君も・・・いつもありがとうね。
ツツ君の勉強教えてくれて。」

「いえ、お母様！10代目のサポートは俺の役目ですから！」
「ふふ、そう？じゃあ、後で紅茶でももっていくわね。」
「はい！」

階段を上り、ツナの部屋に入る。

そのとたん、ツナは叫び声をあげる。

「ひい！！凜奈！？お前、本屋にいったんじゃ……。」
「……うん、行ってきたよ。そして先回りして、ツナ兄たちを驚かそうと思って。」

そこには凜奈がいた。自分の靴を持って。

「でもね、ツナ兄……私、聞いちゃったんだ。」

「へ？何が？」

「ツナ兄が……ツナ兄が私きたせいで、神経がすり減るって！」
「当たり前だぜ、変態ストーカー女。」

獄寺がスキなく罵声をあびせる。

「ひどい、隼人兄！隼人兄は、猿で低脳でムカツク野郎だけど、根は優しいかもって思っていたのに！」

「それ、けなしてんのか、ほめてんのかわかんねえよ！せめて、根は優しいって言い切れ！変態ストーカー痴女！」

「痴女！？ひどい！ひどいよね、ツナ兄！」

「……っていうか、どうやって盗み聞きしてたの？」

「へ？それは盗聴器で……あ、しまった！」

「盗聴器……。どこにつけたの？」

「それは……ツナ兄の下半身。」

「わざわざ卑猥な言い方すんなよ、変態ストーカー痴女盗聴器野郎

！
」

「ポケットにつけたの？」

コクツと首を立てに振る。

「っていうか、隼人兄ひどい・・・。」

「盗聴器をつけられてることも気づかないで、ツナやられたな。」

そこにどこからともなく、リボーンが現れる。

「リボーン！？」

「盗聴器を渡したのは俺だぞ。」

「元凶はお前かよっ！！」

「だってだって丁度良いストーカーグッズだな、と思ったんだもん！
」

「可愛く言ってもダメ！っていうかお前がストーカーなんかすんのか！？」

「俺じゃねえぞ。凜奈だ。」

「・・・凜奈。」

「てめえ！この変態ストーカー痴女盗聴器パンツ盗み野郎！」

「聞きたびに、一語ずつ増えて言ってるのは気のせいだと思いたい！
！っていうか、まだパンツは盗んでないもん！これからしようと思
っていることだもん！」

「するのかよ！-」

ツナの激しいツツコミ。内心ツナは「もう一人、ツツコミ役がほし
い。」と思っている。

「もう最悪だよ。凜奈、今お前が持つてる俺の写真とか全部出して。
」

「ええ！なんで！家宝にしようと思っているのに・・・！」

「もってんのかよ！出して！」
「うう……。」

渋々承知し、今持っているのを全部だす。

「……俺の着替え写真15枚、俺のシャツ2枚、俺のスボン1枚、俺のパーカー1枚、……俺の使用済みストロー2本……。無く
なってると思ったら。」

そこでツナは一区切りおく。

「それと、コレ。コレ何？」

「それはツナ兄の鼻血出血大サービス並のお風呂の写真。これはいい構図でとれてると思わない？」

「思わないよ！っていかどうやってとったのコレ！」

「え、普通に……。入ってカシャ！」

「カシャ！じゃないよ！獄寺君、これどう思う？」

「10代目のお風呂……。着替え……。ブハアッ！」

とつぜん獄寺が鼻血を出しながら気絶。獄寺はログアウトした。

「え！？獄寺君！獄寺君ったら！」

「あははは！！ツナ兄の着替え写真みて興奮してるし！」

「笑い事じゃないよ！とにかく俺のベッドの上に寝かせないと……
！」

獄寺をツナのベッドに寝かせる。みつともないことに鼻にティッシ
ュつめて。

「はぁ……。盗聴器とかカメラで録画とかされないうちはマシだ

と思つてたのに……。これ没収!」

「ええ! そんなぁ……。」

「そんなぁ、じゃないよ! もう俺、寿命が縮んでいくのが自分でも分かる。」

「……。すいません。」

「以後、こんなことしないでよね!？」

「はあい……。 (多分……)」

「つてことで……。今何時!？」

「へ? 今は4時だけど……。」

「あつ宿題しなきゃ! 獄寺君、悪いけど教えて。あ……。」

そう、今は獄寺は氣絶中だから教える人はいない。肝心の家庭教師様もどっか行つた。

「凜奈……。分かる?」

「分からないよ。中2の問題でしょう?」

「うわぁん!!」

それからツナは2時間たつても1問も解けることはできず、刻々と時間が過ぎていくだけだつた……。

ご愁傷様、ツナ!!

ツナの苦悩（後書き）

そういえば、リボットの当選発表が明日でしたよね……。私も参加申し込みしたんですが、当選するといいなあ……。

では、また次回！っていうか、暇なのでまた今日中に更新するかもです。多分！

やっとならぶ目次（前書き）

・ ・ ・ 土日遊びほうけてました！
更新できなくてすみません ・ ・ ・ ！

では、初めて行きたいと思います。

（余談ですが、リボT当選しました）

やつと2日目・・・

「ああ、もう最悪!」

ツナの第一声で始まった。

「ど、どうしたのツナ兄。」

「どうしたもこうしたもないよ!今日は散々だった!」

今は、夕ご飯も食べてツナの部屋でくつろいでいるがツナがお風呂から上がって入ったとたん、第一声がコレだ。

「えーと、私が、ツナ兄の所持品盗んだから?ご、ごめんね!つい、できごころで・・・!」

「・・・。」

「え、何よ!その、虫をみるような目は!」

「・・・はあ、それもあるけど、宿題が終わってない・・・。」

もう一度、ツナは深いため息をつく。

「情けねえな、ツナ。」

そこでリボーンが口を開く。

「俺が、終わるまで付き添ってやるゾ。」

「ええ!嫌だよ!リボーンは俺が回答間違えると、すぐに爆弾ぶっぱなすし!」

「俺はスパルタだからな。」

「はあ・・・こんな家庭教師やダア・・・。」

「じゃあ、ツナ兄。隼人兄に教えてもらえばいいじゃん。」

そう言うと、ツナはまたため息をこぼす。

「・・・獄寺君、理論指導だから・・・なんて言うんだろう。なんか・・・理解しにくい・・・。」

「あはははは！確かに、隼人兄ってそんな感じだよな（漫画ではおなじみだけど・・・）」

「うん。でも、獄寺君、外見はああだけど、頭はいいんだよね。」

「・・・なんかムカツク！頭も良くてルックスもよくて運動神経もいい・・・。はあ・・・。」

それこそ不思議よ。隼人兄、存在自体が不思議。外見は不良なのに頭はいいとか、

隼人兄自体がUMAだわ。」

「あははは・・・。」

ツナが乾いた笑いをこぼす。

「はあゝ宿題どうしょ・・・。」

「また振り出しね・・・。見せてよ、ツナ兄の宿題。」

「うん、いいよ・・・はい。」

そう言って、ツナはプリントを一枚渡す。そのプリントには解いた問題が1つもなく、消しゴムの痕しか残ってない。

「あゝ2年生ってこんな習うんだ・・・。」

「うん、数学とかすごく難しいよ・・・。」

「へえ・・・。」

そこには凜奈には意味がわからない数式や、問題がある。見ただけで目がチカチカするぐらいだ。

「うわ、こんなのやらなくて良いよ！子供は遊びが本業だ！誰だ、子供は勉強が本業だとか

ぬかしてたヤツ。いきてたら私が殺すわよ！」

「ちょ、怖い怖い！でもしょうがないよ、勉強しないといけないんだから！」

「ツナ兄は真面目だね・・・でも、頭悪い・・・。」

「うう・・・。」

「で、でも、頭悪くても、人間中身よ！ほら、ツナ兄は優しいし頼れるお兄さんって感じ！？」

「あはは・・・フオローありがと。」

「でも、ツナ兄。今から宿題しても間に合うかな？今、9時だよ？頼りのリボーンは寝ちゃった

し・・・。」

凜奈の隣には空中でホックをつらし、鼻提灯をしながら、ぐっすり寝ているリボーンがいる。

「げっ！本当だ・・・。解けなかったら嫌でも、リボーンに聞こうとしたのに・・・。」

涙まじりにツナは言う。

「もう今日は諦めて、明日、隼人兄に教わればいいよ！」

「獄寺君にかあ・・・まあいつか。じゃあ寝るまでゲームしようつと。」

「あ、いいなあ！私もやる！」

「うん、いいけど、凜奈は宿題終わったの？」

「うん、終わったよ。」

「早！いつのまに……。」

「まあね　じゃあ始めよう！」

「う、うん……。」

ツナ兄は1本のカセットをとるとテレビゲームの本体に差し込んだ。
チャララ〜と陽気な音楽が聞こえてくる。

「……リズムゲー？」

「うん、太　の達人って知らない？」

「いや、しってるけど……。」

「ならはじめよっか！」

そう言うのと、太鼓と棒を凜奈にもたせる。

「曲、どれにする？」

「うゝん……えーと……。」

悩んでいると、ある一曲の曲に目についた。

「あー！初音　クの初音　クの消失があるじゃん！これやろう！」

「え、コレ？でもコレ、難しいよ？」

「いいからいいから」

そう言っつて、初音　クの曲を流す。

『僕は生まれそして気づく〜』

音楽が流れてくる。最初はとても速い。

ダンドンダンツとリズムに合わせ太鼓をたたく。確かに難しいが、凜奈はあまりはずしてない。

「とりゃああああ！」

よく分からない奇声をあげ、最後のパートに入る。

ドンドンドンッダンドンッドドンッダダンツ！

太鼓のうるさい音だけが部屋に響き、ようやく終わる。

「凜奈、すごいね・・・。」

画面をみたツナはあ然とする。ミスは10回しかなくて、ハイスコアだ。

ちなみにツナは、84回もミスをしていた。

「へーん！ボカの曲には命かけてるからね！ヲタクの見せ所よ！」

「あはは・・・んな大げさな・・・。」

ツナはすごいすごいを連発して良い続ける。

少し、凜奈は誇らしく思う。しかしその態度が何気に腹が立つ笑顔だ。

「すごいなあゝじゃあ、次は負けないぞ！」

「望むところ！」

それから勝負になっていき、いろんな曲を太鼓で奏でる。

凜奈がつぎつぎに勝っていき、凜奈が6勝1敗、ツナが1勝5敗となった。

「うわぁ、凜奈強すぎるよ……。」

「へへっ！まあね」

「今日は疲れたから、また明日にしない？」

「えゝ！もつとやりたいよ！」

「だって、ほらもう10時だし！寝たほうがいいよ？明日おきれなくなるから！」

「ぶゝ……分かったよ。」

口を尖らせながらも、渋々承知する。

凜奈のぶんの布団をひき、明かりを消す。……結構うるさかったのに、リボーンが起きないのが不思議でなかった。

「じゃあ、おやすみ！」

「おやすみゝ。」

ツナがあいさつを言うと、すぐに寝息をたてて寝てしまった。

（寝るのはやつ！……天使のような寝顔をみたいけど、今日は我慢我慢！私も今日は寝よつと）

少し、変態的な発想をしたが、すぐにそれはツナに怒られると思い、やめた。

どうやら理性が勝ったようだ。

それから、まぶたを閉じる。

明日はどんなことが起きるのだろうか。そんなことを考えながら眠りについた・・・。

やっと2日目・・・（後書き）

プリントの内容は書きませんでした。なにせ作者は1年生ですから

ww

・・・なんかゴメンナサイッツツ！

そして、小説が短い・・・。すみません、おもいつきませんでした
あ！

また近いうちに骸とかだしますんで、それでお許しくださいm（|

|）m

では、また次回お会いしましょう！

帰るための会議とかなんとか。多分前編。（前書き）

皆様のおかげで1000PV突破しました！

こんな小説を見て頂きありがとうございます！

もう、感激しておたけびをあげてしまいました

では、どうぞ！

帰るための会議とか何とか。多分前編。

「・・・何、コレ？」

はたまたツナの一声で始まる。

確かに、何コレと言わんばかりの光景が目の前には広がっていた。

「何って、ツナの守護者たちだゾ。」

「いや、守護者じゃないし。先輩たちだし。・・・っていうか何でみんなここに集まってるの？」

ツナの質問に各々答え始める。

「10代目、俺はリボーンさんにこいつって言われたからきたんですけど・・・。」

「ハハッ俺は、なんか話し合いを始めるとか言われたぜ？」

「極限、今から何を始めるのだー？」

「・・・僕は赤ん坊に頼まれてきてみたんだけど・・・ここまで群れてるなんてね・・・。咬み殺されたいの？」

雲雀がトンファアを構える。

「ひ、雲雀さん！ここ、俺んちですからトンファアしまってくださいー！」

「まあまあ、雲雀。ここで耐えたら俺がいつでも相手してやるぞ？」

「・・・本当かい？赤ん坊。」

「ああ。」

リボーンが答えると、雲雀は意外にも素直にトンファアをしまった。

「クフフ・・・マフィア風情が僕を呼び出すなんて。」

「って、何気に骸もきてるし！今更だけど雲雀さんと骸が会ったらやばいんじゃない・・・！」

「大丈夫だぞ、今回は喧嘩するのはやめるとお願いしたからな。」

「そっか、よかったあ・・・。」

安心するツナ。

「で、ランボは？」

「あいつは邪魔だからな。」

「あはははは・・・。」

そこで、ツナはあることに気づく。

「ところで凜奈は？」

「ああ、なんか、リビングで漫画をかいてる、とか言っていたぞ。」

「ま、漫画・・・。そうなんだ。ってか、一体今から何を始めるの？」

「それは後だ。まず凜奈つれてこい。」

「ええ！俺が？」

「お前ボスだろ？」

「・・・それとは関係ないと思うんだけど。」

「つべこべ言わずにさっさと行け！」

そこで、リボーンの容赦ない蹴りが腰にアタック。ツナは廊下に放り投げられてしまった。

扉のむこうから「10代目ーっ！」ってうるさい声がするがツナは無視した。

「はあ、つたく……。凜奈〜！」

ツナが呼ぶとダダダツと凜奈が階段まで上ってきた。

「何、ツナ兄！今、BL描いて忙しいんだけど！」

見ると、手には墨汁やシールみたいなものが張り付いている。

「は！？BL！？っていうか、リボーンが呼んでいるんだけど……」

「へ、リボーンが？」

「うん、だから手、洗いなよ。」

「へ、あ！本当だ！トーンが張り付いてるし！気をつけたつもりなのに〜！」

そんなことを言いながら、洗面所に手を洗いに行った。

すると2分くらいしてから、帰ってきた。

「ふう、お待たせ。ツナの部屋でいいの？」

「うん、……。っていうか俺の部屋以外無いというか……。」

階段を上がり、ツナの部屋に行く。

扉を開ける。

「……。！なんで、みんながここに？」

「げつきやがった！変態女！」

「よっ、柊！」

「……。」

「極限にお前は誰なのだ？」

「また、沢田綱吉のマフィア関係者の方ですか？」

少し、いや、すごく嫌なヤツがいるが、今は無視する凜奈。

「え、なんで？なんでツナの守護者たちがあつまってんの？恭弥兄や、骸（ニコでの扱いは変態）まで！」

「なんかさ、みんな、リボーンに呼ばれてきたらしいんだけど・・・」

「へ、何か始めるの？リボーン。」

「ああ、名付けて『凜奈を元の世界に帰すための会議！』だぞ。」

「・・・え、別にここで住んでも良いけど？」

「凜奈、お前は異次元の世界の住人だろ？」

「おお！そういうとなんか、格好いいね！」

「・・・脳天気だな。」

「今さっきから何を話しているのです？」

骸が聞いてきた。相変わらず綺麗なナツポーの髪型だ。・・・どうやってセツトするのだろう。

「ああ、それはだな・・・。」

リボーンが今までの経緯を話した ドラクエっぽいねww（作者の声）

「・・・異次元からきたなんて、信じられる話じゃありませんね。アルコバレーノ、あなたは

それを信じているのですか？愚かな・・・。」

「しょうがねえだろ。」

「実際、マフィアの世界って信じられないようなものばかりだし。

「10年バズーカとか・・・。」

ツナが言う。

「まあ、信じてあげましょう。」

「・・・ねえ君、強いのか?」

「恭弥兄、話が脱線してるよ。」

「そんなことどうでもいいよ。僕は強ければいい、それだけだよ。」

「いいんだ・・・。」

「で、どうなの?」

「ど、どうって言われても・・・。まあ居合道とか空手とか習っていたし、そこそこ強いと思う

けど・・・。これ、なんか話したような・・・。」

「ふうん。そう。」

するとまた、トンファーを振り下ろした。

「わあ!危ないよ、恭弥兄!」

あわてて受け止める。

「やっぱ、恭弥兄、Sだよな!ドのつくSだよな!でも私、Mじゃないし!痛めつけられるのは

苦手だし!どっちかつつと、ツナ兄にやってもらった方が萌えるし・・・!」

「な、なにいつてんの!凜奈!」

「いや!ツナ兄が暴力を振るわれてると、なんか萌えます!」

「ふざけんなー!」

そんな二人の会話など、スルーするリボンと雲雀。

「おい、雲雀。後でいつでも相手してやるから、凜奈には今は手をつけるな。」

「『今は』ってことは、後でしていいってことだね、赤ん坊？」

「ああ。」

「え、ちょ、リボーン！私、今手を怪我したら致命的なんだけどっ・
・・！」

「まあ、いいじゃねーか。漫画なんていつでも描けるだろ？」

「いや、今度の冬 ミに出そうと思って・・・！あ、でも18歳未満は参加したらダメだと思うから

知り合いのお姉さんにだしてもらおうと思って！印刷もしないといけないし！」

「その冬 ミっていうやつも、元の世界にしか無いんじゃないのか？」

「あっ・・・！」

そこで一瞬、時間が止まったような気がした。多分。

「あああああ！」

凜奈の絶叫が響く。

「そうだよ、そうだよあっ！どうしよう！今年は良いできで、待ってるファンの皆さんもいるのに！」

ちなみに凜奈は中1だが、絵がすごく上手い。もう、プロ顔負けだ。

「だから、その冬 ミに行かせるために、元の世界に帰そうと思ってみんな集まったんだぞ。」

「え、そうなの！？ありがとう、みんな！」

（絶対ちがうー！）

と、ツナは心の中で凜奈を哀れんでいた。

多分、続く・・・と思う。

帰るための会議とか何とか。多分前編。（後書き）

「前は寝て終わったのに、なんで、こんな話し合いをはじめるの？普通

学校の描写から始めるんじゃないの？」

と、思った読者の皆さん。そこはスルーしてください！

作者が、「あー、学校の描写だるーい。」と自分の都合でカットいたしました！

申し訳ございません！

ツ「本当だよ。」

作「はうあつ！ツナ！？」

ツ「しかも凜奈って普通にBLとか言っているし……。」

作「それは仕方ない（キラッ）」

ツ「……作者の趣味？」

作「！！決してそんなわけじゃない！ただ、その……BLだそう！と思いつきで！ほら、過激な描写はないだろう！？」

ツ「……まあ、いいけど。」

作「おっほん！まったく、勘違いもよしてくれ！」

ツ「……じゃあ今回はこれで！次回も見てくれると嬉しいな！」

作「あ！それ私のセリフ！」

ツ「バイバイ！」

作「つーかツナ、お前何気にSだ」（強制終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2819z/>

2次元トリップ！

2011年12月20日17時51分発行